東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会

第４回議事録

平成３１年１月２１日（月）１４時００分～

東京文化会館 中会議室２

【堤座長】　本日は、委員の皆様におかれましては、大変お忙しい中、そしてお寒い中ご出席賜り、まことにありがとうございます。

定刻になりましたので、第４回東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会を開催したいと思います。

まずは、事務局から定足数及び会議の公開に関する確認をお願いいたします。

【赤羽事務局長】　事務局でございます。本年も、どうぞよろしくお願いいたします。

まず、定足数の確認でございます。有識者懇談会設置要綱第４条第２項におきまして、懇談会の会議は、委員の過半数の出席を要しております。本懇談会の委員数は１０名、現在８名のご出席をいただいておりますので、懇談会は成立していることをご報告させていただきます。

本日は、後藤委員及び住吉委員が、所用によりご欠席とのご連絡をいただいております。

本懇談会は、設置要綱第６条によりまして、公開で行うものとされております。資料及び議事概要につきましても原則公開となっておりますが、懇談会の決定により非公開とすることができます。本日の吉本副座長の資料につきましては、委員の皆様及び事務局限りの資料としたいというご趣旨のお申し出がございましたので、吉本副座長の資料は非公開、その他は公開ということでよろしいでしょうか。

（異議なし）

【赤羽事務局長】　ありがとうございます。それでは、本日の会議は公開ということにさせていただきます。

また、傍聴の皆様におかれましては、お配りいたしました懇談会の傍聴に当たっての注意事項のとおり、ご協力をお願いいたします。

以上でございます。

【堤座長】　どうもありがとうございました。

それでは、議事に入ります前に、配付資料について事務局からの確認をお願いいたします。

【赤羽事務局長】　　お手元にお配りしている資料でございます。１点目が吉本副座長ご提供資料で、『オーケストラのゆくえ』というもの、それと第５回以降のテーマ設定について（案）ということでお配りしておりますので、以上、配付資料でお手元をご確認いただきまして、不足等ございましたら、お申し出いただければと思います。

第５回以降のテーマ設定につきましては、意見交換、質疑の後にご説明をさせていただきます。

また、基礎資料集のファイルの中に、第３回懇談会の会議録を追加しております。また、ポケットのほうに、来季のブロシュアをお入れしております。こちらは１月の公演よりご配布しているものですけれども、もしお持ち帰りのご要望がございましたら、事務局の竹末までお申し出いただければ余分を持っておりますので、どうぞご活用いただければと思います。

以上でございます。

【堤座長】　　どうもありがとうございました。

それでは、議事に入らせていただきます。

お手元の議事次第に従いまして、第４回有識者懇談会のテーマであります「オーケストラに求められる多様な活動と社会的役割」について、吉本副座長と澤委員、そして湯浅委員からプレゼンテーションがございます。

ご質問やご意見につきましては、お三方のプレゼンテーションが終わりましてから時間をとりたいと思いますので、よろしくご協力のほどお願いいたします。

それでは、吉本副座長からよろしくお願いいたします。

【吉本副座長】　　ありがとうございます。

この配付資料、オーケストラのゆくえと真ん中に書いてありますが、それはシリーズのタイトルで、私の原稿のタイトルは『社会のためのメセナ』が拓くオーケストラの可能性」というものです。これはＮＨＫ交響楽団の『Ｐｈｉｌｈａｒｍｏｎｙ』という冊子で去年の１月に発表したもので、ホームページでもダウンロードが可能です。

きょうはプレゼンということで、何をお話ししようかなと思ったんですけど、「オーケストラがもっと社会につながるために」ということで素材を用意しました。少し古いんですが、私の研究所でアフィニス文化財団から依頼をされまして、２０１１年度、１２年度、

１年半ぐらいをかけて、オーケストラのあり方に関する調査研究というのを実施させていただきました。

調査内容を簡単に紹介しますと、社会環境の変化を４項目で整理して、国内のオケについてはオケ連の正会員へのアンケート調査を行いました。それから、アフィニスさんは地方オケの振興をメインにやってらっしゃいますので、札幌交響楽団、広島交響楽団の２カ所にヒアリングをしました。海外オケの調査もしましょうということになって、これはプログラム全体というよりも、教育・地域プログラムを中心にということで調べました。

海外調査で実際に私が現地を訪問したのが英国の三つのオーケストラですので、その団体を中心に、きょうはお話をしたいと思います。ＬＳＯ（ロンドン交響楽団）については、前回に後藤さんがお話をされたので、重複する部分はあると思いますけれども、もっと俯瞰的な話をさせていただきたいと思っています。

報告書の内容はご覧いただいているとおりですが、全体をお話しする訳ではありませんので、ご参考ということです。この報告書もアフィニス文化財団のＨＰからダウンロードできますので、ご関心があれば参照いただければと思います。

まず、ＬＳＯからです。この写真は『Ｓｔ．Ｌｕｋｅ’ｓ』という彼らの地域プログラム、教育プログラムの拠点で、１８世紀に建てられた教会を改修したこの施設がＬＳＯの地域活動の拠点になっています。

オケ全体の予算とか組織とかは、スライドの下の方に書いてありますけども、彼らの教育・地域プログラムは『ＬＳＯ　Ｄｉｓｃｏｖｅｒｙ』と呼ばれていまして、９０年にスタート、３０年の歴史があります。音楽を聴いてもらうというだけではなくて、楽団員と一緒に音楽に参画をしていく、あるいは新たな関係を構築するというような、もうちょっと広い概念でプログラムが展開されています。

ＬＳＯは海外ツアーで『Ｄｉｓｃｏｖｅｒｙ』をやることもあるということですので、都響も、次の海外のツアーのときに海外の学校とかでアウトリーチなどができたら、日本のオケはすごいというふうになるんじゃないかなと、思います。

プログラムの構成は五つに分かれています。これは調べたときのもので、今は少し変わっているかもしれませんけど、ネットでざっと見たところほとんど変わってないようでしたので、そのままご報告したいと思います。

何といっても３０種類以上のプログラムがあるというのが一番すごいと思うんですけど。この教育プログラムの成果というのもリサーチをしました。楽団員の演奏会以外の音楽活

動を発展させるというのがもともとの狙いなんですけども、そのことによって楽団員がインスパイアされて、観客との密接な関係を築く、音楽を通して積極的に社会にかかわるというふうに変わってきていると。『Ｓｔ．Ｌｕｋｅ’ｓ』を拠点に『Ｄｉｓｃｏｖｅｒｙ』を展開したことで、ＬＳＯの文化自体が変わったというようなこともおっしゃっていました。地域・教育活動に、とにかくより一層努力するようになったということですね、インタラクティブな関係づくりに。予算も、１０年間で４倍ぐらいにふえるぐらい力を入れているということです。

ちょっと文字が小さくて申しわけありません。お手元の資料にあるので、詳しくは後でそれも読んでいただきたいんですけども、学校向けのプログラムが３本あり、それから地域向けも三つに分かれていて、１０種類以上のものが用意されているということで、本当にいろんなことをやっています。

学校向けのところだけ詳しく紹介しますと、年間６０回、２万４，０００人が参加している。イギリスの教育制度の『Ｋｅｙ　Ｓｔａｇｅ』ということで幾つかに分かれているんですけど、ポイントは年齢に応じて、きめ細かなプログラムを用意しているということです。

初等教育向けの『Ｐｒｉｍａｒｙ　Ｋｅｙ　Ｓｔａｇｅ』というプログラムでは、コンサートを子供たちに聴いてもらう６週間前に楽団員が学校を訪問し、コンサートを聴く前に準備をしてほしいことをちゃんと先生にレクチャーをして、それに必要な資料や録音素材を提供しています。つまり、ただバービカン・センターに来て本番を聴いてくださいという形ではなく、学校での事前プログラムも含め丁寧にやっているということがポイントだと思います。

それから、中等教育以上の『Ｓｅｃｏｎｄａｒｙ　Ｓｃｈｏｏｌ　Ｅｖｅｎｔｓ』になると、もうちょっと音楽の本質に迫るようなことをやっています。スライドにあるアニマトゥールというのは、ＬＳＯの教育プログラムでは重要な役割を果たしていまして、ある種の先導役というか、プログラム全体をコーディネートする人たちが、大変積極的にかかわっています。

ワークショップもあるんですけども、鑑賞じゃなくて作曲なんです。曲をつくるというワークショップをやっていて、しかも２種類あるということで、学校向けにもこんなにたくさんいろんなことをやっているというのが、ＬＳＯの特徴です。

それから、この後に報告する二つのオケも同じなんですけども、地域プログラム、ある

いは教育プログラムの中で、若手音楽家の育成にもものすごく力を入れています。ＬＳＯアカデミーというのは、才能のある器楽奏者を対象に１週間のマスタークラスをやってみたり、若い演奏家とＬＳＯのメンバー、楽団員が一緒に演奏するプログラムをやってみたりとか、そんなこともやっています。

それから、『Ｏｎ　Ｔｒａｃｋ』というのは、ロンドン・オリンピックのときに始まったイーストロンドンを対象にしたプログラムで、その成果としてロンドン大会の開会式では、子供たちとＬＳＯが一緒に演奏をする場面もありました。

デジタルプログラムも、調査をしたときは、まだ始まったばっかりということでしたけども、いろいろこれから強化したいというようなことでした。

運営体制は、ＬＳＯの事務局全体で３３名。教育プログラムが最も大きな部門を占めていて、エレノア・グスマンさんという方がトップで、六つの部門のマネジャーを含め、１５名で取り組んでいるということです。

楽団員の参加形態というのは、ＬＳＯと日本のオケでは多分違うと思うんですけども、基本的にフリーランスで年間の公演回数や希望などを登録するようになっているそうです。教育・地域プログラムを推進するため、調査したときは、７回のワークショップに参加したらコンサートの１回分に換算するなど、何かそんなやり方を工夫していて、将来的にはそれを盛り込んだ契約を年初に結ぶということもあるんじゃないかということでした。

次は、ＢＢＣ響です。ＢＢＣ響にはメディアベールという、放送とか、リハーサルとか、ワークショップの拠点になっている場所があります。

彼らも教育プログラムに力を入れていまして、その象徴的なプロジェクトは『トータル・イマジネーション』と名付けられています。発端は、２００２年にラーニング・マネジャーというポジションを設けて、教育と結びつける活動を活発化させたということでした。ＢＢＣは公共放送網がありますので、音楽活動を、さらに広く社会に働きかけることができるだろうというような意図もあるということでした。

いろんな世代の人たち向けにやっているというのは、ＬＳＯと同じで、これも、やっぱりポイントだと思うんです。ＬＳＯでも同じような部門はありましたけども、聴く者とつくる者を分けずに自分たちの音楽を一緒に創造する。やはり作品をつくるとか、新しい音楽をつくるというようなことをワークショップなり教育プログラムでやっているというのが、大きな特徴だと思います。

そして、年齢層の四つの区分というのは、ＬＳＯとほとんど同じですけども、その全体

を融合したようなプロジェクトを『トータル・イマジネーション』というメインプロジェクトとして展開しています。

成果としては、観客動員にプラスになったということもありますが、ＢＢＣ響でもやっぱり楽団員の意識変化や教育プログラムの技術向上などがあげられています。

もうひとつのポイントは、ギルドホールとか、ブリティッシュ・カウンシルとか、バービカン・センターとか、このＢＢＣ交響楽団だけでできることは限られているので、とにかくパートナーシップを組むということにすごく力を入れていて、それが活動の広がりにつながっているということです。キャリア拡大とか、社会貢献とか、音楽家、楽団員自身の意識も変わり、活動の幅も広がるという効果が出ているということです。

『トータル・イマジネーション』の具体例としては、北欧の音楽に焦点を当てたものとか、オリヴァー・ナッセンの６０歳のプログラムとかがありますが、調査で実際に拝見したのは「サウンド・フロム・ジャパン」というもので、大野さんが中心になっていろいろやっておられました。

ワークショップとか、スクールコンサートとか、ランチタイムコンサートとか、日本の音楽家の作品を数多く取り上げて、最後、バービカン・センターで藤倉大さん、細川俊夫さん、武満徹さんのコンサートが行われました。

でも、そのコンサートの当日にバービカン・センターのロビーで行われていたのが、すごく興味深いものでした。『Ｓｔｒｅａｍ　ｏｆ　Ｓｏｕｎｄ』という小さな催しだったんですけども、武満さんの「音の流れのとしての音楽」という発想を起点にして、数週間にわたって一般の市民の方々が参加してワークショップを行われました。それをリードしていたのが、アニマトゥールのＤｅｔｔａ　ａｎｄ　Ｎａｔａｓｈａさんという二人組、ユニットだったと思いますけども、彼らがリードしていって曲をつくったんですね、実際にこの武満さんの発想に基づいて。

その演奏会がバービカン・センターのロビーで行われて、写真ではわかりにくいですけども、アン・ハリルドさんという人が京都のレジデンスに滞在したときに、何か水の流れとかの写真を撮っておられて、それを投影しながら一般市民の方々が演奏するというものでした。本番前にそういうものもロビーで行うんだという、非常に興味深い演奏会というかプロジェクトでした。

ＢＢＣ響も多様なプロジェクトに取り組んでいて、次代の才能開発、人材育成に力を入れていますし、観客の育成なんかもやっています。

それから、三つ目はバーミンガム市交響楽団です。スライドのＣＢＳＯセンターは、１０年前ぐらいにできた室内楽のホールなんですけども、ここが彼らの教育プログラム、ワークショップ等の拠点になっています。

バーミンガム市響も、やはり民間支援が大幅に減ったり、公的支援が減ったりして、要するに戦略を立て直す必要があったということで、調査したときに、ちょうどその戦略計画を検討している最中でした。１０個の戦略目標の中にちゃんと教育的なプライオリティ、公益的なプライオリティというのを掲げて、教育・地域プログラムに取り組んでいる。芸術的なプライオリティはもちろん重要なんだけども、それと同様に、こういう社会プログラムとを重視するという方針が明確に打ち出されています。

バーミンガム市響の場合は、教育・地域プログラムはラーニング・アンド・パーティシペーションという言い方をしていますけども、全ての人が音楽とかかわりを持つこと、さまざまなバリアがある場合はそれを取り除いていくというようなことを目的にしています。もともとは、この二つは別の組織だったらしいんですけども、それを統合することによって、より効果的にやっているということでした。

バーミンガムを中心とするウェスト・ミッドランズ地域を対象に、年間３万５，０００人ぐらいの人にアプローチしている、アクセスしているというようなことです。

そして、プログラムはご覧のような構成になっていまして、バーミンガム市響も、パートナー団体と共同して実施しているのが特徴でした。若手の才能育成というのがしっかり入っていますし、それから、バーミンガム市響の楽団員も含めたプロの音楽家の能力開発というのも、含まれています。

成果としては、子供と接することで、楽団員自身がすごく成長するそうです。コミュニケーション能力を高めたり、そのことを通じて楽団員自身がいろんな工夫をするなど、専門的な技能が高まっている。

子供たちに与える効果としては、作曲、演奏、ダンス、言葉、演劇、パフォーマンス等の創作に取り組むことで、子供たちのヒューマンスキルを高めたり、チームづくりを学んだり、達成感が得られて、自分の価値の認識、自信ですよね、とか自己肯定感を獲得するというようなことが成果として報告されています。

たまたまリサーチに行った日にやっていたのが、こんなことまでやるんだというような取り組みで、オーケストラが、子供たちの交通安全教室というのをやっていたんですね。会場はさっきご覧いただいた室内楽ホールなんですけども、このプログラムは、民間企業、

たしか地元の法律事務所のメセナというか支援活動として行われていました。その法律事務所の担当者がバーミンガム市と相談をして、音楽でバーミンガム市が直面する課題を解決することはできないだろうかという話になったときに、バーミンガム市では、子供たちの交通事故の増加が、大きな課題になっていたため、それに挑戦してみようというので開発、実施されたのが、このプログラムです。

ちょっと説明しにくいんですけども、室内楽ホールの床に道路が描かれています。この写真の方が当日のファシリテートをしていたんですが、学校の先生だろうなと思っていたら、何とセカンドヴァイオリンの首席の方ということでした。道路を挟んで反対側にヴァイオリンがつってあって、彼女は、ヴァイオリンを最初持っていません。ヴァイオリンがないと演奏できないというので、道路を渡って、ヴァイオリンを取りに行こうとするんですけども、そのときに他の楽団員の人たちが自動車やバイクの役に扮して道路を通行して、なかなか渡れないというような設定になっています。そういうことを何回かを繰り返して、最後にヴァイオリンを手にして演奏できるという流れになっています。

そのときに歌う歌が、今スライドに映っているものです。ちゃんと横断する場所を見つけましたとか、横断する前に右左をちゃんと見ます、といった歌詞になっている。ワークショップを通して、子供たちがこの曲を一緒に歌って覚えるんですね。実際には、道路を渡るときに注意して渡りましょうというキャンペーンのようなものだと思います。オケがこんなことまでやるんだととても驚いたんですが、そういうプログラムもバーミンガム市響はやっているという例ですね。

運営体制は５人ぐらいのスタッフでやっているということでした。さっきも申し上げましたが、いろんなパートナーと組んでやっているということで、そうじゃないとこれだけの広がりのある活動はできないということでした。そして、こうしたプログラムに向けたスキルアップをするために、女優から演技指導を受けるとか、いろんな工夫をしているということです。

コミュニティー系のプログラムは、たしか５ポンドぐらいだったと思いますけども、参加費をとってやっているものもありますので、多少の収入にはなる。それから、交通安全教室もそうでしたけど、教育・地域プログラムは、ファンドレイジングにもすごく有効だと。ドイツ銀行は、学校のプログラム全体をスポンサーしているということでした。

演奏家の参加形態なんですけども、楽団員が率先してやっていくというのが基本で、事務局はそれを支援するということになっているようです。

楽団員のトレーニングも教育プログラムの中に入っています。プロとしての能力育成をしていくということですけども、楽団員が必須のエッセンシャル・トレーニングというのがあったり、即興とか、ボーカルとか、パブリックスピーキングとか、教育プログラムをやるために、いろんなスキルを学べるようになっています。

インタビューに応じてくれた楽団員の一人で、たしかチェロをやっている方だったと思いますけども、その方は「楽団員自身が楽しんでいない教育プログラムは、それはプログラム自体に問題がある」とおっしゃっていました。つまり、楽団員一人ひとりにとにかく適したプログラムをやるのが重要だと。例えば、学校での活動が苦手な楽団員ももちろんいます。だけど、そういう楽団員には若手育成に取り組んでもらうとか、適材適所で、とにかく自分がやりたいと思うようなプログラムを組んでアレンジしていく必要がある、ということでした。

少し時間がオーバーしそうですが、カーネギーホールのことも一つだけ紹介させて下さい。別の調査で調べたものですけれども、カーネギーホールも教育活動をすごく積極的にやっていて、ワイル音楽研究所という専門の機関をつくっています。そのときに取材したディレクターのサラ・ジョンソンさんという方はたしかサントリーホールとも交流があるとうかがいました。

【堤座長】　　そうです。

【吉本副座長】　　彼女の言葉が、音楽教育プログラムの意味を一番よくあらわしていると思ったので、紹介させてください。それは「２１世紀において身につける能力は、想像力、創造力、協調性、チームワークであり、こうした能力を伸ばすためには、アートや音楽が非常に適している。一部の子供たちにとっては、アートだけが彼らの興味を引きつけ、インスピレーションや達成感を与えることができる場合がある。アート教育において達成感と自信を得ることができた子供たちは、ほかの教科にも積極的に取り組むようになり、全体的な学力を伸ばすことにもつながる」というものです。

これは、学校側から見たときに、オケなり音楽演奏家が来るということがどんな効果があるかということを、よく説明していると思います。

そして、これは先ほどのアフィニスの調査の最後の分析のところでつくった図なんですけども、教育・地域プログラムをたくさんやることによって、オケの支持層が拡大し、やがてそれがオーケストラの運営基盤の安定につながってくる。それ以上にこういうプログラムをたくさんやるということは、オーケストラが音楽を通して地域社会と向き合ってい

く回路のようなものをたくさんつくっていくということじゃないかなと思います。

きょうは、イギリスの例をご紹介しましたけど、決して外国のオケがこんなに進んでいるから、日本のオケもこうやるべきだという、今はそういう時代ではないと思うんですけど、教育プログラムとかは、まだ海外から学ぶ部分があるんじゃないかなということで紹介をさせていただきました。

最後に都響と比較してみたいと思います。都響は、前回のオリンピックのときに創設されましたけど、設立の趣意、楽団の目的や楽団の運営はご覧のスライドのとおりです。演奏会もすごい回数をやってらっしゃって、今、事務局は３３名。予算は十六、七億ぐらいで、そのうち１０億が都からとなっています。

教育関連事業も本当にたくさんやってらっしゃって、鑑賞教室とか、大野さんのマエストロビジットとか。鑑賞教室だけじゃなくて、アーティスト交流教室という少人数でやるものなど、既にたくさんやってらっしゃいます。小規模の演奏会もやってらっしゃいますし、それから被災地支援なんかもやっているということで、イギリスの例で紹介した教育・地域交流プログラムは、既に都響さんは相当やってらっしゃる。でも、何かもう少し工夫ができる余地が、ひょっとしたらあるんじゃないかなと思います。

ここから先は全く勝手な提案なんですけど、せっかく今度オリンピックがあるので、前回のオリンピックで創設された都響は次のステップを目指します、ということはできないかなと思います。設立趣旨はやはり５０年以上も前のものという感じがとってもして、それも大切にしなきゃいけないと思うんですけど、都響ビジョン２０２１というものをつくるチャンスではないかと思って、勝手に描いてみました。

例えばビジョンを三つにまとめるとすると、一つ目はオーケストラ音楽をきわめていきます。二つ目は、きょうご紹介したものですが、地域社会、市民と向き合います。それから、今はあまりやってらっしゃらないと思うんですけども、三つ目が、次代の育成に取り組みますということで考えてみました。一つ目を少しかみ砕くと、首都東京のオーケストラとして国際的なプレゼンスをアップしていきますとか、音楽監督のビジョンに基づいて、幅広いレパートリーもやる、そして楽団員のさらなるスキルアップをやりますといった感じで、オーケストラ音楽をきわめるために、そういうことにさらに積極的に取り組んでいくというのが一つ目。

二つ目は、もう既にやってらっしゃいますけども、もう少し多様化して、強化して、鑑賞を中心としつつ、演奏したり、作曲したり、創作したり、そういう工夫ができる余地が

あるんじゃないかなと思います。地域向けプログラムも、高齢者、障害者、外国人、あるいはＬＧＢＴとか、マイノリティーとか、失業者とか、上野はホームレスが大変多いので、そういう人たちに対して音楽を通して何かできることはあるんじゃないか。

前回か前々回にも意見が出ていましたけど、アニメとかゲーム音楽とか、オーケストラ音楽に対して未知の聴衆と出会うような工夫というのも、あるかもしれない。

それから、次代の育成に取り組むということでは、澤学長がいらっしゃいますけど、勝手に東京藝術大学との連携と書いてしまいましたけど、藝大オケの優秀な人を何人か選抜して都響と一緒に共演して、大野さんに指揮してもらうとか。あるいは、そういう人たちと学校公演に一緒に行ってもらうとかする。都響の拠点が上野にあるというのはやっぱり圧倒的な強味だと思いますので。それから、演奏家の育成だけでなく、指揮者の育成とかも考えられる。さらに、きょうは詳しくは紹介しませんでしたけど、作曲家を支援するようなプログラムもＬＳＯはやっています。短い曲を何人かに作曲させて、一番優れた曲をつくった人に実際１０分の曲を委嘱して、バービカン・センターで公演するみたいなことをやっています。そして何といっても、子供たちの音楽教育への取り組みということが、次代の育成につながると思います。

これは、私の勝手な意見なんですけど、調査の結果だけじゃなくて、職業柄ついつい提案したくなるので、書いてみたというところです。

少し長くなりましたが、私のプレゼン、これで終わりたいと思います。ありがとうございました。

（拍手）

【堤座長】　どうもありがとうございました。すばらしいプレゼンテーションだったと思います。

それでは、続きまして、澤委員、お願いいたします。

【澤委員】　ありがとうございます。吉本委員のような、しっかりとした現状分析は全然できておりませんので、ちょっとどんなことが言えるかというところですが。

オーケストラは、本来的、伝統的な意味合いでの目的からすると、クラシック音楽の伝統をしっかり伝える、よい演奏をすること、あるいは新しい音楽の紹介、そして、演奏会場でのみならず、アウトリーチを通じてそういったものを聴いていただく底辺を広げる。この辺のことは、もちろん今までも都響さんはしっかりやられていると思います。

それで、今、吉本委員のプレゼンにもありましたけれども、後進を育てるというところ

で次世代の育成、これはいろんな意味合いがあると思います。音楽に生涯初めて出会うような初心者に対してのこと、それから、将来プロを目指すような小学生や中学生に対する早期教育的なところに、オケのメンバーたちがかかわってくださること。

それから、先ほど東京藝大との連携というふうに言っていただきましたけれども、オーケストラ・アカデミー、Ｎ響にはオーケストラ・アカデミーがありますし、海外の一流オーケストラにオーケストラ・アカデミーを持っているところは多いと思いますけれども、都響さんもこういう形で持ってらっしゃるのかどうか現状を知りませんけれども、常にやっぱり次世代を積極的に育成するという点では、ただエキストラで演奏に来るというだけではなくて、これを組織的にオーケストラ・アカデミーという形で実現していただければと思っています。

それから、これも先ほどのプレゼンにもありましたけど、指揮者とか作曲家のための育成プログラムといったもの。それから、今、特に人生１００年時代ということを、去年、おととしあたりから盛んに言われていますけれども、生涯教育の一環としてのリカレント教育、今まで音楽にそれほど親しみのなかった人たちへの教育的な意味合いを持ったものというのも、積極的に提案していただければというふうに思っています。

それと最近、『ＳＤＧｓ』という言葉が大分定着しつつありますけれども、「Ｓｕｓｔａｉｎａｂｌｅ」「Ｄｅｖｅｌｏｐｍｅｎｔ」「Ｇｏａｌｓ」ということで持続可能な開発目標というところ、これが２０１６年１月から国連の決定事項として世界百四十数カ国で今言われていて、これから２０３０年に向けての十四、五年間に達成すべき目標として１７の目標が挙げられているというふうに言われています。

これの中には、当然ながら気候変動への対策とか、海洋資源の保全、ちょっとオーケストラの目標として直接結びつかないだろうというものも多いわけですけれども、この中では、質の高い教育の実現とか女性の社会進出の促進というようなテーマについては、都響のみならず、オーケストラがかなりかかわれるところであるというふうに考えています。

女性の社会進出というところで、この本来のテーマと直接かかわりがあるかどうかは別として、都響のメンバー構成をホームページから見せていただきましたけれども、コンサートマスターを含めると約９０人の方がメンバーでいらして、そのうちのちょうど４０％の３６名が女性奏者というところで、これは比率からすると、非常にまっとうなところで、むしろ日本のオーケストラとしては男性比率が女性を上回っているというのは、逆に珍しいのかなとも思います。

一方で、首席とかコンサートミストレスの四方さんも含めると、首席を務めてらっしゃる方が、セカンドヴァイオリンの遠藤さん、オーボエの鷹栖さん、クラリネットのサトーさん、この４名というふうに読めました。首席、コンサートマスターも含めると、２６名中の１５％ぐらいであります。だから、これは、やはり日本はいわゆる一般社会でも女性の社会進出というところで、特に管理職的な重要なポストということからすると、パーセンテージがまだまだ低いので、この『ＳＤＧｓ』で掲げられた１７の目標の中でも赤信号がついていることだと聞いています。

一方で音楽を志す若い世代、藝大も含めて音大ではもう女性が圧倒的に多くて、そして非常に優秀な学生、あるいはプレーヤーが多いわけですけれども、そういった意味では、男性のプレーヤーは絶滅危惧種というような現実もあるわけで、そういう現実と相反して、オーケストラの中でも重要なポストを占めるところでは、まだまだ女性が少ないという現状は、何らかの形で見直す必要があるんではないかというふうに感じています。

それから、今、訪日外国人が非常にふえていて、昨年ですか、３，０００万人を超えたと言われていますけれども、来年の２０２０年には、その倍の５，０００万から６，０００万ぐらいを国のほうでは期待しているというふうに言われています。そういったインバウンドに向けての対応というのも、今後オーケストラには期待されるところです。

とりわけ上野は、文字どおり日本の玄関口でもあり、日本の文化集積地として非常に訪日外国人、人気の場所であります。上野駅の公園口にあって、世界遺産の西洋美術館の前に位置するこの東京文化会館を本拠とする都響には、やはり日本を代表するオーケストラとして、これまで以上に日本のオーケストラの水準の高さを示していただきたいと思っています。

それで、ちょっと先ほどの女性進出にもかかわる部分だと思いますけれども、もう既にやってらっしゃるかもしれませんが、平日のマチネの機会というのをふやしていただきたいというふうに思っています。女性の場合は、そのプレーヤーの側も、あるいは聴衆の側も、やはり平日の夜とか、あるいは週末の午後の場合、家族にかかわる必要があったりしてなかなか演奏会に出ていけない人が多いと思いますし、高齢者も今、今後ますますクラシック音楽の聴衆層は高齢化すると思われるわけですけれども、やっぱり夜に出かけるということをどうしても避けたがる傾向がありますし、いわゆる職業的には退職されたような方も多いわけですし、そういった方向けに平日のマチネの演奏会というのは、今までの常識とは違って、非常に人々から歓迎されるのではないかというふうに思っています。

それから、ちょっといろいろ話が飛んで恐縮ですけど、ホームページを見せていただきましたが、当然ながら英語のホームページはありますけれども、今インバウンドの大部分は、やはり中国、韓国からの方で、ホームページの少なくても中国、韓国語を入れるとか、特に上野とか谷中はフランス人が好んで来るので、将来的にはフランス語なんかもつくれればいいというふうに思っています。

それから、ちょっと本当に今回のテーマというよりは、次回のテーマに少し入っちゃうかもしれませんが都響のブランディングというところで、東京だけで１０ともそれ以上とも言われているプロフェッショナルなオーケストラの中で、やっぱり都響を、ぜひ我がオーケストラだと思ってもらえるファンをよりふやす必要があると思います。野球とかサッカーのようなプロスポーツの場合は、地元に密着したファンを持つというのが当然なわけですけれども、私は絶対都響のファンだと言い切ってもらえるファンをふやす。

都響グッズというようなものというのは、今どれぐらいあるんでしょうか。私、たまたま、先週、ロサンゼルスに行っていまして、ＵＳＣ、南カリフォルニア大学と藝大の共同プロジェクトで行っておりましたけれども、南カリフォルニア大学は大変なマンモス大学ですけど、そこのキャンパスの中に４階建てのちょっと小ぶりなデパートのようなところがあって、入ってみたらほぼ全フロアが、このＵＳＣのグッズで埋め尽くされていました。Ｔシャツとかトレーナー、帽子とかキーホルダーというような小物だけではなくて、車のナンバープレートのカバーとか生活用品まで、ありとあらゆるものがＵＳＣブランドで埋め尽くされていて、それで、その後、ウォルト・ディズニー・コンサートホールに行きましたら、そこにやっぱりロサンゼルス・フィルハーモニックのグッズを売る大きなショップがありました。アメリカとちょっと文化の違いはあると思いますけれども、そういったことも含めて、もっとチャレンジしていってもいいと思います。

都響を我がオーケストラ、我が故郷ならぬ我が都響と言ってもらえるようなファンをふやす、交響組曲「我が都響」というのを、池辺晋一郎さんあたりに作曲をお願いしたらどうでしょうか。

あと、我が東京藝術大学も、今はかなりブランディングに力を入れ始めていまして、タグラインというのを今募集しております。タグラインというのは、ご存じの方も多いと思いますけど、各企業のイメージを非常に短い言葉であらわす、「お値段以上」というのとか、「お口の恋人」とか。サントリーのタグライン、ご存じですか。「水と生きるサントリー」。やっぱり都響が、ほかの在京のオーケストラとはこういうところが違うんだとい

うようなものを、本当に１０文字前後の言葉であらわせるようなものというのを持っていると、団員さんたちも気持ちが変わるんじゃないかと思うんです。

ちなみに、今、藝大で私が応募しようと思っているのは、「心の豊かさをデザインする東京藝大」とか、「革新を生み、伝統へと育てる藝大」とか、そんなようなものがあるといいかなと思います。これも完全に次回のテーマになってしまいましたけど。

あとは、指揮者でも、ある種の雲の上の存在であることも重要ですけれども、もっと聴衆の方と距離間をなくせないかというところで、大野和士さんのカリスマ性を持ちつつも、実は私もゆるキャラがありまして、これ、「カズキチャマ」というんですけど。だから、都響も、「カズシチャマ」とかをおつくりになったらいいんじゃないかと思います。

最後に、近隣のアジア諸国にはできるだけ、毎年でも出かけていくようなことが必要じゃないかと思います。アジアの経済的成長は、今後も最も期待できるわけですし、アジアに向けて音楽、それも演奏だけでなく教育輸出というところで、非常に期待できる市場だと思います。

個人技では、中国、韓国、あるいはベトナムなどに世界水準のプレーヤーは珍しくなくなってきていますけれども、室内楽とかオーケストラというふうになると、まだまだ日本や欧米の水準に到達するには、これからまだ二、三十年はかかると思いますし、今、中国は経済的にかなり豊かな感じです。一方で、韓国はこのところ文在寅政権で、残念ながら、今、余り国と国との雰囲気はよくないですけども、逆にこういうときだからこそ、文化芸術の力でこれ以上の関係悪化を防ぐということも必要だと思います。

ベトナム、タイ、マレーシアなどは、かなりクラシック音楽の水準が上がってきているようですし、今、日本の音楽界が貢献できることはとても大きいと思っています。経済発展が著しいインドも、今後日本のこういう音楽文化をきっと受け入れてくれるんじゃないかというふうに考えております。

ちょっと取りとめのない話になってしまいましたけれども、以上です。ありがとうございました。

（拍手）

【堤座長】　どうもありがとうございました。

それでは、続きまして、湯浅委員、お願いいたします。

【湯浅委員】　ありがとうございます。本日の「オーケストラに求められる社会的役割」という非常に大きなタイトルで、吉本委員と澤委員のプレゼンテーションの後に続く

のが大変なプレッシャーです。すでにお二人がいろいろな面からお話しいただいて、かなりの示唆があったと思うんですけれども、私のほうからは、英国の事例を、ご紹介させていただきたいと思って、スライドを用意しました。

あと、皆様、英語がご堪能な方がきっと多いと思うので、私が少し怠けてテキストを英語のままにしているものが多いのですが、ご容赦いただければと思います。

まず最初に、本日のタイトルが「オーケストラに求められる多様な活動と社会的役割」というふうにありましたが、これは、英国でも活発に議論されていることです。英国で、アーツカウンシル・イングランドというイングランドの文化芸術の振興を推進している機関があります。アーツカウンシル・イングランドは、文化芸術の社会における価値というものを、広く社会に訴えています。その一環で、文化芸術機関とも連携し『Ｗｈｙ　ｃｕｌｔｕｒｅ　ｍａｔｔｅｒｓ、(なぜ文化が大事なのか)』というキャンペーンも展開し、ています。

アーツカウンシル・イングランドの作った映像をご覧いただきました。その一部を、改めて日本語に訳してみます。「文化芸術というものは、私たちの人生の全てを豊かにしていく、そして人々に喜びをもたらし、この世界を理解する手助けをしてくれる、そして、人と人をつなぎ、分かりあうことを助けてくれる。そして、それが私たち人間にとって一番大事なことだ」と言っています。そもそも文化芸術というのは、とても大きな力を持っていて、文化的な価値だけでなく、教育的な価値、社会的な価値、また、経済的価値、さらに人々の健康や心身の幸せ、充足というものに貢献をすると訴えています。これはオーケストラを含めて、文化芸術というものは、社会のあらゆる面において、有効な価値をもたらすということだと思います。もう一つ、お話ししたい点ですが、現在、英国では文化芸術分野において多様性、平等性、包摂性を担保するということが推進されています。英国では、2012年にパラリンピック競技大会を開催した経緯もありますが、それよりもずっと前の約３０年以上前から障害のあるアーティストの権利獲得の運動もありました。また、そもそも“多様性”が英国の大事な価値観であるということもあります。しかし、文化芸術分野において、多様性や平等性が担保されているかというと、まだまだ障壁はあります。

ここで、アーツカウンシル・イングランドのダイバーシティの担当ディレクターが来日した際に使用したスライドの一部をお借りして、ご紹介させていただきます。アーツカウンシル・イングランドでは、ここ数年『Ｃｒｅａｔｉｖｅ　Ｃａｓｅ　ｆｏｒ　Ｄｉｖｅ

ｒｓｉｔｙ』という戦略を描あげています。多様性を推進するに当たり、ビジネスケースとか、チャリティーモデルなど、様々なアプローチがあります。アーツカウンシル・イングランドでは、”クリエイティブ・ケース”という言葉を使い、そもそも文化芸術がクリエイティブであるためには、多様化性が担保されていなければいけないと言っています。これは、文化芸術機関が実施する事業の内容、アーティスト、観客が多様であるということを目指すとともに、文化芸術分野で働く人材も多様であるべきだと言っています。先ほど女性の登用について、澤先生からお話がありましたように、文化芸術分野で働く人材、組織の代表や理事などのトップマネジメントも含めて、多様な背景の人材が活躍できる環境を整えるべきであると言っています。そして、多様なデータを用い、現状を分析し、支援が必要なところに投資をすべく戦略を練っています。ここでいう多様性についてですが、現在日本では、２０２０年のパラリンピック大会開催に向けて障害のある方の芸術参加や、少子高齢化を受けて高齢者に対する対策について関心が高まっていますが、人種、宗教とか、ＬＧＢＴ、収入の格差、そのほかあらゆる背景を持つ人々について、誰もが排除される機会が均等であることを目指しています。ここで、アーツカウンシル・イングランドが制作した多様性に関する映像をご覧ください。

（映像視聴）

【湯浅委員】　今ご紹介した映像では、先ほどもお話ししましたが、文化団体の事業、アーティスト、観客、そして組織自体が多様であることが真の意味でクリエイティブであると訴えていました。そういうことを担保することによって、一番最初のスライドでご紹介したように、文化芸術が社会的価値や経済的価値や教育的価値、さらに健康までの幅広い価値をもたらせるんだということだと思います。

もう一つ、スコットランドのアーツカウンシルである、クリエイティブ・スコットランドでも「多様性、平等性、包摂性」が主要な戦略の一つと位置づけられています。「Ｅｑｕａｌｉｔｉｅｓ，Ｄｉｖｅｒｓｉｔｙ　ａｎｄ　Ｉｎｃｌｕｓｉｏｎ」、ＥＤＩというふうに略しますが、イングランドと同様に、ありとあらゆる面でＥＤＩを担保していくことを目指しています。クリエイティブ・スコットランドでは、助成をしている芸術団体に対して組織のミッション、戦略、事業計画の策定において、ＥＤＩを戦略として組み込んでいくことができるようにツールキットを提供しています。

この後、２月の中旬に、クリエイティブ・スコットランドのＥＤＩの戦略部長を、横浜市さんと横浜の財団と共同で招聘します。詳細が決まったら、ぜひ都響の皆様にもご案内

を差し上げたいと思っております。

ここから、駆け足で三つの事例をご紹介します。

まず最初は、マンチェスターの音楽団体、マンチェスターー・カメラータです。私たち、ここ二、三年、カメラータと共同で日本でも事業をしています。マンチェスター市は、市全体の施策として、エイジフレンドリーシティという施策を進めていて、英国の都市として初めて、「エイジ・フレンドリーシティ」としてWHOの認定を受けました。この施策を進めるに当たり、商業、交通ほか、市の様々な団体と連携して、高齢者が生き生きと暮らせるまちづくりを進めています。そこで芸術団体も連携をして、エイジフレンドリー、マンチェスターの中でカルチャーグループというものをつくっています。そのメンバーである、マンチェスター・カメラータは特に高齢者の方に向けたプログラムで注目をされています。

実は、マンチェスターは非常に移民の方も多いこともあり、カメラータは教育プログラムで、移民を対象にしたものも実施していますし、そのほか、赤ちゃんから、若者、障害のある方ほか様々な人を対象にプログラムを行っています。高齢者を対象にしたプログラムでは、『Ｍｕｓｉｃ　ｉｎ　Ｍｉｎｄ』というプログラムを行っています。これは、アルツハイマー協会、Ｃａｅｒ　ＵＫというケアに関する団体、マンチェスター大学、ランカスター大学などと連携して展開しているプログラムです。

このプログラムは、認知症の方と、その介護者の生活の質、ＱＯＬの向上というのを目指しています。そして、プログラムの効果をマンチェスター大学の認知症研究の専門家と連携をして検証しています。

（映像視聴）

【湯浅委員】　音楽療法士とも連携をしながら、カメラータの音楽家が実際にケアホームに行って、重度の認知症の方々と曲づくりのワークショップをしていきます。日本でもオーケストラの皆さんは、高齢者施設など行かれると思いますが、英国のオーケストラの場合は、リサイタル形式のプログラムではなく、介護施設のスタッフとも連携をしながら、参加型で即興の手法を用いて、一緒に曲を作るという手法を取ることが多くあります。参加者の方々が主体的にかかわることを大事にしていて、その結果、参加者の方々が生き生きとしたり、介護者と豊かなときを過ごせるようなプログラムをしています。プログラムを通して、例えば認知症の方たちが豊かな時間を過ごせて笑顔が多くなったり、自発的な行動が増えたりするなどの変化が見られます。また、介護をしている方々も、当事者の方

の普段見られない表情などがみられて、その後の当事者との関係が好転し、ひいては介護者の方のＱＯＬ向上につながるという効果も見られるようです。また、家族の方にとっても、当事者であるご家族と豊かな時間が過ごせたというような大きな効果が出ています。実際、マンチェスター大学との研究の中では、音楽プログラムに参加することにより、抗鬱剤などの薬の摂取量が減ったという結果も報告されているようです。こうした、参加型のプログラムの効果検証をする場合、プログラム参加の前後の変化を計ることが多くありますが、マンチェスター・カメラータは、マンチェスター大学と連携し、プログラム実施中の“ｉｎ　ｔｈｅ　ｍｏｍｅｎｔ”、参加している瞬間の変化を計る研究をしていて、こうした分野で世界初のＭＡのコースを設立する計画があると伺いました。次に、ロイヤル・フィルハーモニック・オーケストラの事例をご紹介します。ここは『ＳＴＲＯＫＥＳＴＲＡ』というプログラムで注目されています。「ＳＴＲＯＫＥ」って脳卒中などの麻痺という意味ですが、この言葉とオーケストラをまぜた『ＳＴＲＯＫＥＳＴＲＡ』というプロジェクトを実施しています。これは、オーケストラによる麻痺患者のためのリハビリテーションのプログラムです。これも先ほどのカメラータと同様に、音づくりを通しながら、その対象者の方の機能回復の一助になるというものを目指しているのと、介護者及び、家族との関係性の向上を目指しています。

このプログラムは、ロイヤル・フィルハーモニック・オーケストラがイングランドの北東部にある、ハルという都市のコンサートホールのレジデントオーケストラになったことがきっかけでスタートしました。レジデントオーケストラとしては、そこですばらしい演奏をするというのが最大のミッションであるけれども、自分たちが新しくハル市に行くのであれば、私たちが得意とする全てのものをそこの地域に持っていきたい。つまり、私たちは教育プログラム、地域のプログラムでも非常にいい実績を上げているので、ここで地域に貢献をしたいというふうに話を考えたそうです。

そこで、このオーケストラの教育担当者は、ハルの市当局に行って、文化の部署ではなく、福祉関係の部署に行って、現在、どういった課題があるか話を聞いたそうです。そこで福祉局の方が、脳卒中の麻痺患者が多く、それらの人々の医療費が高いということを言われたそうです。それであれば、オーケストラの教育プログラムの強みを生かして、何かができないかということで、この『ＳＴＲＯＫＥＳＴＲＡ』をスタートしたそうです。プログラムを実施するに当たり、オーケストラがハル市の福祉局、医療に関する団体と協働しました。プロジェクトを始動するにあたり、まずはＲ＆Ｄのフェーズをつくりました。

そこで医療関係者と連携し、リサーチに時間をかけ、当事者が主体的に参加する音楽づくりの手法がいかに、麻痺患者のリハビリに効果があるかを検証し、プログラムをデザインしていきました。そして、そのリサーチ結果をもとに、プログラムの規模を徐々に拡大していきました。このプロジェクトの効果検証の結果は、彼らのホームページでも発表されています。レポートによると、参加者の機能の回復においても効果が報告されていますが、さらに心理面でも有効な効果が見られたそうです。さらに、介護者の方々のＱＯＬについても好転が見られたという結果が出ました。音楽で麻痺が完治するということはないのですが、オーケストラが医療・介護関係者と連携してプログラムを行うことにより、良い効果を得られたそうです。実際に、このプログラムに参加した方のなかには、これをきっかけに音楽やそのほか新しいことを始めた方もでてきたそうです。

最後にもう一つ、これまでと少し違う事例ですが、ボーンマス交響楽団をご紹介します。先ほど、アーツカウンシル・イングランドの多様性に関する取り組みをご紹介しましたが、その一環で実施されている『Ｃｈａｎｇｅ　Ｍａｋｅｒｓ』というプログラムで支援を受けました。これは、将来芸術団体、芸術の中で障害のある人たちがリーダーとなれるようなことを後押しするためのプログラムです。芸術団体が、障害のあるアーティストを受け入れ、研修をする機会を提供するとともに、団体自身も多様性・包摂性に対するコミットメントがたかまることを目指したプログラムです。この助成プログラムで、２０団体が支援を受けたのですが、その中で唯一のオーケストラがボーンマス響です。

ボーンマス響は、障害のある指揮者であるジェームズ・ローズを受け入れました。ジェームズは、子供のころから脳性麻痺で車いすを利用しているのですが、音楽家になるのが夢でした。ｉＰａｄなどを使い、曲をつくったりとかもしていたんですが、数年前に王立音楽院で指揮の勉強もし、コースでも勉強をし、その後、テクノロジーを活用し、障害のある音楽家の音楽活動を支援する団体であるドレイク・ミュージックの協力で頭を動かすと指揮ができる指揮棒を開発しました。このジェームズをボーンマス響が１８ヶ月ホストをしました。１８ヶ月間のレジデンスを通して、ジェームズ自身も大きく成長しましたが、ボーンマス響という組織にとっても大きな変化があったそうです。

その結果、ボーンマス響の中に、『ＢＳＯ　Ｒｅｓｏｕｎｄ』という障害のあるプロの音楽家によるアンサンブルが生まれました。そして、この『ＢＳＯ　Ｒｅｓｏｕｎｄ』は、昨年の「ＢＢＣ　Ｐｒｏｍｓ」で演奏もしました。

『ＢＳＯ　Ｒｅｓｏｕｎｄ』が生まれただけでなく、ボーンマス響の組織運営も大き

く変わったそうです。音楽家を含む全スタッフが「Ｄｉｖｅｒｓｉｔｙ　Ｅｑｕａｌｉｔｙ　Ｔｒａｉｎｉｎｇ」を受け、組織の中に「Ｄｉｖｅｒｓｉｔｙ　Ｃｈａｍｐｉｏｎ」という役割を設け、あらゆる人が参加できるようアクセシビリティにも最大限配慮しているそうです。

本日ご紹介した、どの団体も目指しているのは芸術の本質的な価値、すばらしい音楽を全ての人に届けていくということと、それによって社会のあらゆるところに貢献をしていくということです。また、どの団体も組織のミッション、ビジョンにその精神が反映されています。また、音楽であればどんなプログラムでも良い効果が期待できるということでもないと思います。大事なのはプログラムの内容と質。英国では、長年の経験から、参加者が主体的に参加する参加型のプログラムが多く行われています。オーケストラの教育プログラムでは、即興の手法を用いて、参加者が自由に創造性を発揮できる音楽づくりのプログラムが主流です。さらに、医療、福祉の専門家との連携、教育・リサーチ機関との連携も多くみられます。

こういったプログラムを実施する際に大事なのは、誰を対象にするのかということだと思うんです。芸術団体による教育プログラムの報告書などでは、ワークショップの数や参加者の人数のみ書かれているものも見られますが、大事なのは、どういった層の人々が参加し、どのような変化が起きたかということです。そこでは、エンゲージメントストラテジー、どういった社会に対するエンゲージメントをしていくのかという戦略性というものが必要であり、一体、今コンサートホールに来ない人たち、アクセスのない人たちはどういう人たちで、そういう人たちはどういう課題があって、そのために音楽で何ができるだろうという戦略づくりをすることが大事ではないかと思います。そして、目指す目標を達成するためにどういったパートナーと連携し、そして、目指す効果が達成されたのか検証することも大事ではないかと思います。

（拍手）

【堤座長】　どうもありがとうございました。お三方の本当にすばらしくて、もう私も聞きほれてしまいました。特にコラボレーションとか可能性、パートナーシップというのが非常に強調されたご意見だったと思います。

それでは、お時間にもなりましたし、意見交換に移りたいと思います。ご発言の委員へのご質問等を含めまして、積極的にご発言、ご意見をお願いしたいと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

【池田委員】　今の湯浅さんのお話で、認知症の方のケアに当たっている方が、オーケストラにも効用があるとわかっていない場合が多いんじゃないかと思います。都響の歴史の中で、例えば歴代の首席指揮者、音楽監督の中でガリー・ベルティーニさん、私がフランクフルトに住んでいた３０年前、オペラハウスの音楽総監督だったんですが、毎年アルテ・オーパーという旧歌劇場のホールで毎年フェスティバルがあって、そして何年目かに、世界の違う文化の交流ということで、いろんな国の合唱団を呼んで、最終公演がブリテンの戦争レイクエムを指揮しました。これはオーデンの詩で、ロシアとドイツとイギリスで、とにかく戦争で戦った３カ国の歌手が独唱するというふうに作曲家が想定して、戦後に書いた曲ですけど、これの合唱を、アフリカの合唱団とかポーランド、まだ冷戦が終わっていない時期ですけど、東側の合唱団とかいろんな国の合唱団がそれぞれの民族衣装を着て舞台に立って、見せてました。

それから、ジェームズ・デプリーストさん。この人は、日本のオーケストラでは珍しいアフリカ系米国人の指揮者で、しかも、子供のころにポリオを患って、つえをつきながら出てきて、座って指揮をする方でした。彼のおばというのはマリアン・アンダーソンといって、アフリカ系米国人で最初にメトロポリタン歌劇場のソリストに抜粋された大アルト歌手です。多分、だからベルティーニさんはユダヤ人だし、デプリーストさんはそういうことで、ご本人それぞれ地元とか、ご自分が音楽監督をやっている欧米のオーケストラではそういう活動をやっていたと思うんですけど、残念ながら都響の側に引き出す能力がなかったから、そういう部分に関しては全く活用されなかったというようなことをふっと最後に気づきました。都響の会議なので、あえて言えば。

それから、ファシリテーターという言葉を、よくこういうのは外国のほうが進んでいるということで聞くこともあるんですけれども、なかなか日本語に訳せないですね。チーフ・コミュニケーション・オフィサー、ＣＣＯとか何かいろいろ浮かぶけど、何かオーケストラと社会の接点をつくり、なおかついろんな音楽が有効とされる分野でどんどん翼を広げていくような立場の人の職業を、やはり認知されるには、もうちょっと日本的な名称を与えるということも必要じゃないかなと、今、湯浅委員と澤委員と吉本委員の話を聞いていて、そんなことを思いました。

【片山委員】　片山でございます。

もうお三方のご意見は本当にすばらしくて、ポジティブな話に、こういうことをやればオーケストラが社会から認知されたり、余り興味のない人も、やはりこういうものはある

ことが大事なんだと、そういうプラスのご提案に満ちたお話で、大変感銘を受けて聞いておりました。とはいえ、この話を東京都交響楽団というものと、組み合わせるときにどういうふうになるのかということは、多分最終的なこの会議の答申として出すようなものの目標にもなるんだと思いますけれども、またいろいろと考えなくてはいけないかと存じます。

例えば、余りポジティブじゃない話になったら困るのですが、今のようなことを、例えば都響が定期演奏会とか、いろんな演奏活動をしながら、メンバーが積極的に、例えば認知症の治療のこととか、そういうことについていろんな形で携わっていくようなプログラムをたくさん実行するなどということを考えたときに、団員の負担とか、例えば都響のメンバーが持っているスキルに、どれだけプラスアルファをしなくてはいけなくなるのか。給料などの待遇の面にどのように反映させるのか。ＬＳＯだったら、若い楽員にある種のインセンティブを与えていって、そういう活動をやらせるようなことだったと、吉本委員のお話から理解いたしましたが。それはどうしたら都響に応用可能になるのか。都響の、それなりの待遇を受けている人たちにこういうことをプラスでやらせるということを考えたときに、なかなか難しいだろうなとも思います。どういうふうなことが現実的に可能なのか、クラシックの音楽の演奏家が、特にやはり障害のある人とか高齢者に対して、やっぱり生きた音楽がいろんないい影響を与えるというのは、さまざまな研究があると思いますけれども、それはオーケストラのメンバーがやらなくても、それはもう澤委員もお隣にいらっしゃいますけども、優秀な音楽家が、日本社会には仕事がなくて余っていて、山のようにいるわけですから、例えばトランプ的に雇用拡大とかいって、そういうのをみんなここの給料で、そういう音楽挺身隊みたいになって高齢者施設にどんどん行ってこいとかって、渡し切りで基礎の給料を上げて、あとは歩合で上げますかなんていうと、オーケストラがやらなくても、幾らでもやる人は出てきてしまうわけですよね。

そういうことを考えたときに、都響とかN響とか、どのオーケストラがどういうことをやるということを考えたときに、ほかの人がやってもいいじゃないかという話と、かなりきょうの話というのはダブってくるとは思うんです。なぜ都響がそれをやらなくちゃいけないのか。そうすると東京都のオーケストラ、パブリックのオーケストラだからということは一つあると思うんです。それは本当に大事で、だから東京都の例えばいろんな施設に対してそういうことをやればいいというふうにも言えるとも思うんだけれど、それでも東京都というのは、例えばやっぱりバーミンガムとか、ボーンマスとかだと、やっぱりそこ

そこの、小さなまちのサイズなので、一つのオーケストラがまちのいろんなものに対してアプローチをかけると、町中に認知されるような形でできると思います。ところがロンドンだとかなり大きいし、東京の場合はとてつもなく大きい。やっぱり先ほどのお話にも、湯浅委員のお話にもあったように、何回やって何人来ましたみたいなアリバイづくりみたいなことになってしまって、本当に東京都民に対して効果のあるようにやろうとすると、もしポジティブに取り組んでも、都響の人員だけではプラスになるようなことというのは、冷静に考えたら多分やりにくいだろうと。

ただ、これは言葉は悪いんですけど、とても役に立つことをやっているような状況をたくさんつくり出して、それをＮＨＫとか、朝日新聞とか、三浦雄一郎さんが山に登っていますみたいに取材をさせたりすると、感動の物語を生み出すということは簡単にできるでしょう。けれども、それが持続性のあるものなのか、まさに持続的に発展して、効果をもたらすものにするということは、かなりオーケストラのメンバー、収入、時間の使い方、どういうミッションを持たせるのかという基本的な条件設定をいろいろいじらないと、恐らくうまくいかないだろうと。このミッションが、オーケストラが社会に認知されるためにやるのか、収入をふやすためにやるのか、寄附金をふやすためにやるのかという、それはまたミッションの問題もそこで問われなくちゃいけないし、どのミッションのためにこれが有効だということを、多分周到に考えなくてはいけない。

一般論としてすばらしい話も、例えば、そういうことをやってオーケストラが収入がふえましたというと、じゃあ都の補助金は、これだけ勝手に稼ぐようになったんだから、少し減ってもいいでしょうってとんとんになって、何か、かえって労働条件が悪化して、都響の優秀な首席奏者たちはもっといいオーケストラに転職してしまって終わりとか、そういうストーリーもあり得るわけですよね。

そうすると、何をやったら都響にとってもプラスで、都民にとってもプラスで、社会的にもプラスでというのは本当に難しい問題で、きょうのいいお話をどういうふうに都響に生かすのかということは、私もよく考えてみたいと思いますし、むしろ東京都のいろんな行政に携わってこられて都響に来ておられるような方に、いろんな経験をお持ちだと思うので、ぜひ伺ってみたいとも思うんですけれども。

本当に総論は大賛成だけれども、各論としては、たくさんの難しいことがあるなということを考えながら聞いていました。でも、もちろんきょうの提案の方向が実現して、いいことがたくさん起きれば、それはすばらしいわけなんですが。そうなることを祈りつつ、

やはり何か意見を言わなくてはいけないので、ちょっと変なことを申しました。失礼いたしました。

【中根委員】　　３人の方のプレゼンテーション、大変興味深く拝聴いたしました。それぞれに大変刺激されるところがございました。

オーケストラがいろんな社会的な貢献ができるのではないかという視点から、特に教育の分野でいろんなことができるという、まさにそのとおりだと思いますし、それから、澤委員がおっしゃっていた国連の『ＳＤＧｓ』との関係で、どういうふうにオーケストラの役割を定義していくかというのも、恐らく１７目標があって、本当にいろんなところで、多分、心のケアとか人間の安全保障といったようなところにも、多分音楽というのはいろいろ入り込めていくのかなという印象を持って、その意味では、私自身、考えたことがなかったんですけど、確かに『ＳＤＧｓ』という大きな目標の中で、オーケストラの役割をどう定義していくかというのは重要なことだというふうに思いましたし、他方で、やはりオーケストラと聴衆との間の距離を狭めていくということで、まさか澤委員からそういうご提案があるとは思っていませんでしたけども、ゆるキャラとか、そういうようなグッズとか、いろんなものをあれして、本当に親しみやすいオーケストラにしていくというのも大変重要なご指摘だと思います。

それから、これはきょうのテーマというよりは、もっと大きな観点からでしょうけども、外国との関係、特にアジア諸国に対しては、まだまだ日本の進んだ音楽文化を押しつけにならない程度に輸出するというようなことも考えていいんじゃないかというご指摘も、確かにそのとおりだと思います。ドイツなんかで時々、アジア、タイとか中国とかがかなり立派なホールを貸し切って、その国の一番優秀なオーケストラというのを連れてきて、演奏会を何回か聴いたことがありますけど、確かにまだまだ演奏とか日本のレベルには至っていないという気がいたしましたので、まさに澤委員と同じ問題意識を共有するものです。

それから、湯浅委員の報告の中では、特に音楽が、認知症であるとか障害者のケアにどういうふうに貢献を果たしていくかということで、いろんな試みが既にイギリスで行われているということに大変感銘を受けました。日本でもこうした取り組みが、ぜひ行われるといいなというふうに思った次第です。

それと、いろんなオーケストラの社会的な役割という観点から発して、恐らくもういろんな形であると思いますけど、日本は自然災害の非常に多い国なので、チャリティーコンサートのような形でもオーケストラというのはいろんな貢献ができると思いますし、単に

募金活動という観点のみならず、被災したすぐ後というのは無理かもしれませんけども、ある程度期間がたったところで、その現地に赴いていって、心のケアという観点からオーケストラのすばらしい演奏を聴いてもらうというのも、これは非常に被災者の心のケアという観点から大きな貢献になるんではないかという気がいたします。そういう意味では、そうした災害とかに関して、よりオーケストラの果たし得る役割というのも重要かなという気がします。

特に、私は、ウィーンとベルリンにいたときにちょうど東日本大震災が起きて、遠い日本という国の大災害であったわけですけども、現地の人たちが大変に心配して、チャリティーコンサートというのを幾つもいろんなところでやってくれました。しかも、これはどちらかというと日本の関係者が主体となってやったものですけども、震災が起きたときだけではなくて、その後１周年、２周年、３周年と、それぞれ３月１１日の前後に、いろんな団体がやっぱりオーケストラのような形でチャリティーコンサートを開いてくれたということがあるので、日本でも自分の国はもちろんですけども、他国における大きな災害があったときなどに、そうした形でのチャリティーコンサート等を開いて国際的な貢献を果たしていくというのも、オーケストラが果たす役割としては、今後考えてもいいんではないかというふう気がいたします。

以上です。

【堤座長】　　どうもありがとうございました。

ちょっと韓国というお話が出ましたので、ちょっと補足させていただきますと、実は、韓国のソウルに韓国国立芸術大学というのがございまして、ことしも私、そして藝大教授の清水高師先生が客員教授として招かれております。そういう形でアジアですか、そういうことにも力を、何かできるんじゃないかなと思っておりますし、それから、確かに、今こんな席であれですけども、確かに政治的には難しいんですけども、私、既に２年間その職におりまして、特に私が韓国にいるから難しいとかそういうことは全然ございませんでした。ですから、一般的にはノーマルですし、多くの方が、実は私に日本語で話しかけてくるんですけども、その辺が非常に微妙なので、私は英語で返すようにしておりますけども。そういうことで、いわゆる民間レベルというんでしょうか、そういう意味では、余り心配しなくてもいいんじゃないかなと。すみません、余計な補足をさせていただきました。

【石田委員】　一つ大きく感じたのは、片山委員と全く同じことだと思うんですけども、オーケストラの団員のインセンティブがどれだけ、これだけさまざまな事業をやるという

ことに対して担保されうるのかということに、とても興味を持ちました。

本来、いい音楽を本当にすぐれた水準でやるということだけを目指して、恐らく小さいころから教育を受けてきたオーケストラの団員の方々が、今や社会のニーズが変わってきたと言われつつ、こういう活動にかかわることが、自分の芸術活動の高みを目指すという中で、どれだけそれを豊かにしてくれるものだと受け止められているのか知りたいです。その辺の知見があれば、ぜひ吉本委員や湯浅委員に伺えたらなと思います。

ちょっとアジアの話が少し出始めましたので、この間の私の中国での体験も含め、少しだけお時間をいただいてお話ししたいと思います。澤委員のお話はそのとおりだと思うんです。アジアに向けて我々が何を発信できるのかということを、本当に真剣に考える機会になりました。

圧倒的な物量、それから人の多さ、怒濤のように流れていく社会の大きな渦、そういったものに圧倒されたというのが、私の今回の上海での体験でした。

もちろん中国中の、中国国内から来た本当に多くのオペラの関係者というのが一堂に会した機会に、呼んでいただいて行ったんですけれども、彼らの持っている思いを二つの言葉で言うと、私にとっての印象は、中国での「オペラ」の台頭、それと関係者の葛藤でした。台頭というのは、先生方に前回にもお話ししたんですけれども、すごい勢いでオペラハウスをつくっている、すごい勢いでいろいろなことを輸入させている、輸入している。それは、お金に飽かせてという感じではありましたけれども、今の中国の現状でもある。その一方で、これまでクリエイションを積み重ねてきた作曲家、そういった人たちが民族オペラ、あるいは西洋オペラということに対して、自分たちの創造活動がどう位置づくのか、自分たちの立場はこれからどうなっていくのか、どのような創造性の方向を持てばいいのか、すごく葛藤していた。それを感じました。

それは、また別の機会でお話しすればいいと思っています。もう一つ、そのときに上海交響楽団の演奏会に行きました。驚くことに、聴衆が異様に若いんです。その人たちが本当に楽しんでいるという様子を見てきました。この人たちが自然発生的に中国で湧いて出てきていて大きな市場であるということで、欧米の注目も集めているのだと思うんです。

彼らのオーケストラの演奏、上海交響楽団なんて、上海の多様性を反映しつつ、スマートなおもしろい演奏するなと私は思っているんですけど、ほかのオーケストラも、単に欧米を志向しているだけではなくて、本当に豊かな自国の文化に基づいた、とても幅のある音程感、揺らいだリズムが確かに存在していて、それがとてもおもしろい。

それから、もう一つ、これが衝撃だったんですけど、ザルツブルグ音楽祭のヤング・シンガーズ・プロジェクトの中国ツアーにも行きました。日本には来てないです。ザルツブルグ音楽祭は海外でプレスカンファレンスをやっているんですが、昨年、ヨーロッパ各国、中国、韓国でもやっています、日本でやりましたか。過去の事情があるにせよ、やっていませんね。

彼らのホームページにも、今年の音楽祭には、中国からは何人の人が来ている、韓国からは何人の人が来ている、ですが日本からは何人という紹介はなされていない。そのヤング・シンガーズ・プロジェクトのツアーも、中国どまりです。そういうことが起きているというのが、アジアの現状です。

そうした中で、私たちに、これから何をアジアに向けて、あるいは海外に向けて発信するのかということになってくると、やはり教育輸出、教育ということだと思うんです。これだけ高い音楽教育レベルというものを、先生方のご尽力のおかげで持ち得ている我々には、教育で海外とつながるということはできるというふうに認識しています。

ちょっと話が広がってしまいましたが、これからの都響をはじめとする日本のオーケストラに求められる、役割ということがどうなっていくのかということを考える一つの材料としてお話ししました。

話が戻るんですけれども、オーケストラの団員というのは、こういったさまざま社会的な活動に対して、どういうふうなメンタリティで臨んでいるかということというのは何かご存じでしたら、ぜひお知らせいただきたいんです。例えば、ロンドン・シンフォニー・オーケストラなんて、どういうふうに考えているんでしょうか。ご存じでしたら教えてください。

【吉本副座長】　今の石田さんのご質問とか、それから、さっき片山さんがおっしゃっていたことというのは、僕もすごく気になるところです。都響も、音楽鑑賞教室５４回、５万人の子供たちにやっているという現実がまずあると思うんです。だけど、きょう僕が紹介したようなものまで工夫して、本当に団員の方が興味を持ってやれるのかどうかって、僕自身も大きな疑問があるところです。なので、都響もどういうことをやっているのかというのも調べて、最後にご紹介をさせてもらったんですけど。

でも、僕が取材した範囲では、日本ではどちらかというとコンサートホールでの演奏会と、教育プログラムとか地域のプログラムと分けて考えがちだと思うんですけど、英国の例では、それをどうつなぐかということが大きな課題になっています。結局、学校向けに

いろんなことをやるということが本番の演奏にもプラスになっているというようなことを、僕が取材した方々はすごくおっしゃっていた。それは、もちろんスキルの部分もあると思うんですけども、意識改革という意味合いも大きくて、両方を分けるということをまずやめたほうがいいんじゃないかなというのが一つです。

それと、繰り返しになりますけれども、都響の楽団員の方もこれだけの数をやっているということは、そこには時間も労力もエネルギーも使っていらっしゃる。でも、例えば５４回のうちの１０回は何かほかのことに挑戦するとか、今までやっていたものと同じものではなくて、ちょっと違うことに挑戦してみようというような余地はあると思うんです。それをおもしろいと思ってくれる楽団員はゼロではないと思うんです。全員が全員そのことをやりたいとは、思いませんけど。

きょう紹介した中でも、バーミンガム市交響楽団だったと思いますが、事務局の人も楽団員に合うプログラムというのを考えて、マッチングをすごく工夫しているという話がありました。学校に行っても何もできないという楽団員には、じゃあ、自分の演奏のスキルを若い演奏家に伝えるということだったらできるよねというので、そういうことを一生懸命やってもらっていると。楽団員自身が楽しんでやらないプログラムは決していいプログラムじゃないということをおっしゃっていたので、そこは相当ハードルは上がると思いますが、何か小さくても、少しチャレンジをしていくような余地というのはあるんじゃないかなというのが、僕が感じた部分です。

【池田委員】　あとは社会における、やっぱりキリスト教の相互扶助精神というのかな、やっぱりコンピューターになる前でしたけど、私が住んでいたのは、銀行の支店に行くと、いろんな教会とか文化の団体への、金額と自分の口座番号とサインさえすれば、いろんな寄附が簡単にできるような仕組みが整っていて、何か多少でも自分に余裕のある人は人を助けるという文化の中で育ってきた人と、自分のスキルをとにかく上げなきゃという競争社会の中で生きてきた人たちが集合体として成り立っている社会との違いというものを、やはりそこでは考えなきゃいけないのと、あとは、それぞれのオーケストラの歴史というものもあると思います。例えば、都響は、やはりオリンピックの翌年にレガシーとしてできたオケで、自治体がきっちり保障してきたので、多少の浮き沈みはありましたけど恵まれているほうで、日本フィルみたいに、解散の危機で分裂して二つのオケになったというようなところは、逆に市民運動に支えてもらったから、被災地に三、四人で行ってとか、いろんなさっき出たような活動は、歴史の中で自分たちでやるようになっているオケも、

日本のオケでもあるわけだし。

それから、大野和士さんとも、数日前に別のインタビューで同じ意見でしたけど、東京という街が大き過ぎるので、さっきも片山先生がおっしゃっていたように、バーミンガムとか、ボーンマスと、そのフルでしたっけ。

【湯浅委員】　　ハル。

【池田委員】　　ハルね。そういうのとは事情が違って、例えば、都響はサントリーホールと港区教育委員会と組んで、港区内の小学校４年生だけのための教育プログラムというのを毎年やっています。結局「みんないらっしゃい」のキャッチオールパーティーじゃなくて、注射針、特定のターゲットにきちっと刺していくようなことを、それぞれ東京に１０もオーケストラがあるんだったら、地域なり担当分野を分けてやるとか、やっぱり一種の社会連携の中で考えないと、皆さんおっしゃるように、都響の楽員さんだけにこれを全部、ＡからＺまで押しつけるのは本当気の毒だと思います。そういう何かシェアリング、きょうのテーマで、言葉で、今のトレンドで一つ出なかった言葉がシェアリングですけど、東京の中でのそういう音楽文化の中で、それぞれのオケがシェアリングしながら豊かにしていくというような発想が、もうちょっとあればいいかなと思いました。

【湯浅委員】　　多分、片山委員のほうから、すごく率直な、正直なフィードバックだったと思うんです。

こうしたコミュニティを対象にしたプログラムの話になると、何でプロオケがやらなきゃいけないのかという質問を受けることがあります。また、音楽家にとってのインセンティブは何なのかという声も聞きます。まず一つ、なぜプロオケじゃなきゃいけないのということですが、英国のオーケストラ、または芸術団体のマインドセットとしては、プロオケだからこそできることは何だろうと探しているんだと思うんです。プロフェッショナルな音楽家がいるオーケストラだからこそできることはないのか。

日本でも音楽療法に関わる方が、医療の現場で素晴らしいプログラムをしています。音楽療法士ではなく、オーケストラでないとできないプログラムというものがあるのです。音楽療法じゃ、一対一でプログラムが行われることも多くあります。英国のオーケストラの方が話していたのですが、オーケストラのプログラムは参加型のプログラムをグループに対して行います。そうすることによって、参加者同士のつながりが強まったり、コミュニケーション力が高まるという効果もあるそうです。

あとは、英国はシビル・ソサイエティとか、パブリックに対する意識が高いかもしれま

せん。日本が低いと言っているわけではもちろんありませんが、特に市民の税金である公的資金を受け取って芸術活動をしている文化団体は、一部の市民だけに対してプログラムを提供するということは許されないという意識が強くあると思います。

オペラとか、バレエとか、オーケストラなど、劇場は多くの観客でいっぱいになっていると思います。ですが、劇場に足を運んでいるのは、社会のなかでほんの一部でしかないのです。特定のオーケストラファンであったり、収入のある方も多いと思いますが、そうした社会の一部の人だけに向けて活動を提供するというのは絶対に許されないんだと思うんです。もちろん、団体独自の方向性、考え方があり、必ずコミュニティプログラムをしないといけないということではありませんが、公的資金を受け取って活動しているからには、あらゆる市民に対して広く開かれた活動をする義務があるのではと思います。都響も、都民の税金を受けて運営をしていると思いますが、一部の音楽ファンだけでなく広く都民に対してどのような形でお返しするのかというのを考えなきゃいけないんじゃないかなと思いました。

あとは、音楽家のインセンティブの問題ですが、先ほどお話ししたような高齢者施設や、多様な市民を対象にした教育プログラムには、オーケストラの首席ヴァイオリン奏者含め様々な音楽家が参加しています。教育プログラムに定評のあるＬＳＯの代表と話をしたときに言っていたのですが、音楽家によってはコミュニティのプログラムが苦手な人もいて、もちろんそうした人に強要はしない。でも、音楽家によっては、こうしたプログラムに大きな喜びを感じて、積極的に参加する音楽家も多くいると言っています。約２～３０年前にこうした参加型の教育プログラムをＬＳＯなど英国のオーケストラがスタートした際、始めたときは、三、四人から始めているんです。いきなり全楽団員には強制はしなくて、関心のある数人に対してトレーニングをして参加型のプログラムのファシリテーションのスキルを育成したそうです。そうして、徐々にそのほかの楽団員の参加が広がって言ったようです。こうしたプログラムをする音楽家が言っていたのですが、自分たち音楽家は息をするように音楽をしている。私が社会に対してお返しできるのは、この音楽を使ってしかできない。そして、こうした人と直接かかわるプロジェクトという者がとてもやりがいがあり、音楽家としても成長できると話していました。

昨年の秋にＬＳＯが来日公演を行った際、日本の高齢者や障害のある人との曲作りのプロジェクトを行いました。本番の直前に最後の発表会をサントリーホールで行ったのですが、本番前だというのに、本公演と同じ熱量でプログラムに参加してくれました。

もう一つ、数年前にＢＢＣ交響楽団の代表とお話ししたときに、こうしたコミュニティ・教育プログラムの重要性は幾つかある。一つは、オーケストラとしての社会への貢献。もう一つは、音楽家の育成にはこれは欠かせないと。音楽家のやる気がすごく出るのと、あと、音自体がすごくよくなると。ハーモニーがすごく一段と変わると言っていたので、これはもう欠かせないと言っていました。

もう一つ、経営的な面でいうと、ＬＳＯの代表も話していたのですが、こうしたコミュニティに対するプログラムは、企業のＣＳＲのアジェンダとの親和性が高く、企業とのパートナーシップを結びやすいそうです。

【堤座長】　どうもありがとうございました。すばらしいご意見、尽きませんけども、時間になりましたので、きょうのところはここで意見を閉めたいと思います。

本当にありがとうございました。本日のご意見を踏まえまして、次回以降の議論を進めたいと思っております。

それでは、第５回の懇談会のテーマや懇談会報告書について、事務局より確認をお願いしたいと存じます。

【小川ＧＭ】　それでは、資料に沿いまして、第５回以降のテーマ設定についての案をご説明いたします。Ａ４の１枚の資料をおつけしてございます。

まず、来年度の懇談会の回数ですが、今年度同様に３回の予定としまして、最終の第７回で報告書のまとめをしていただくという流れで考えてございます。次回、第５回につきましては、「オーケストラの魅力とその伝え方」をテーマとして、これまでの懇談会の議論も踏まえまして、オーケストラのファンを獲得していくために、どのようなＰＲが有効なのか、改めてオーケストラの魅力とその伝え方について、さまざまな角度からご議論いただきたいということで、プレゼンテーションにつきましては、堤座長、住吉委員、中根委員にお願いしたいと考えております。

また、報告書につきまして、次回、第５回で報告書の構成についての説明を行いまして、第６回で報告書の骨子案についてご議論をいただいて、第７回、最終第７回で報告書の案を提示した上で最後のご議論をいただいて、まとめを行うという予定で考えております。

開催時期につきましては、第５回を７月、第６回を１１月、最終の第７回を来年１月というふうに考えてございます。

説明は以上です。どうぞよろしくお願いいたします。

【堤座長】　どうもありがとうございました。

ただいまの事務局案につきまして、ご意見、ご質問等をお願いいたしたいと存じますが。

【近藤理事長】　　しばらく間隔があいて、５、６、７とあるわけですが、その間に、例えばＬＳＯは来る、ことし。

【湯浅委員】　　この教育プログラムをやるので……。

【近藤理事長】　　キャサリンとか来る。

【湯浅委員】　　はい、秋にやる予定……。

【近藤理事長】　　例えば、そういう人とセッションを設けて、彼女、あるいは実際の演奏家に意見を聞いてみるとか。そういうようなセッションを、もし可能であればやったらいいかなと、ふと思ったんですけれど。この委員会の正式な会合ではないけれども、補助的な、またお時間をとってしまいますけども。有志だけでも結構ですが、そういうようなことをちょっと思いついたので、もし差し支えなければ、それをちょっとトライしてみたいと思います。

【池田委員】　　来月、横浜で何かっておっしゃって。

【湯浅委員】　　横浜市とは、クリエイティブ・スコットランドのダイバーシティの担当を共同招聘します。３月の初旬には、テクノロジーを活用して障害のある人の音楽活動を支援するドレイク・ミュージックのメンバーも招聘し、音楽家向けのトレーニングも実施する予定ですので、またぜひご案内したいと思います。

また、来年度以降もＬＳＯとは、プロジェクトを今やれたらなと思っております。

【堤座長】　　すばらしいですね、ありがとうございます。

それでは、特にご意見としてはございませんようでしたので、こちらで進めていただけたらと思います。

それでは、最後になりますけども、近藤理事長、きょうの議論をお聞きいただきまして、何か一言いただけますでしょうか。

【近藤理事長】　　ありがとうございました。本当にすばらしいご発表で、一つ一つうなずいておりましたが、片山先生もおっしゃいましたように、都響の限られた時間とリソースと人員の中で、どこにどれだけ配分したらいいのかは大きな課題であると感じております。当然ながらトップのオケになりたい、世界から招いてもらえるようなオケになりたい、これは絶対に捨てられません。それから、マスタークラスのように、いわゆるポスドク的な若い芸術家を何とか上のレベルまで上げていくことにも、プロとして尽力したいと思います。更に子供たちに音楽を聴かせることもやりたい。それに加えて、教育とか社会福祉

的施設へのサービスもやらなきゃいけない。でも、２４時間しかない中で、どういう配分がいいのか、どういうポートフォリオが一番都響にふさわしいのかということを、改めて考えざるを得ません。

そこで、やはり他のオケと違うのは、十数億のうちの１０億は都から、都民の税金をいただいているというところですので、音楽芸術分野でのアスピレーションとは別に、こうした特徴を踏まえて、最後に申し上げた社会貢献的なところには、都響として、それなりのというか、相当程度のリソースを割いたほうがいいのかなと思っております。まだ今の思いつきだけで、最終的にご提言をいただくまでに、さらに考えてみたいと思います。

【堤座長】　どうもありがとうございました。本日は、委員の皆様から、さまざまなすばらしいご意見をいただきまして、ありがとうございました。大変貴重なご意見、ご議論をいただきましたけども、残念ながら、本日は閉会の時刻となってしまいました。

最後に、事務局から、その他ということで何かありましたら、お願いいたしたいと存じます。

【赤羽事務局長】　どうもありがとうございました。ただいま、ご説明させていただきましたように、第５回以降の懇談会の日程のご相談を具体的にさせていただきたいと思っております。近々、事務局のほうから候補日をお伝えさせていただきますので、相当先のところまで含まれますけれども、皆様方ご調整いただいて、ご予定いただければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【堤座長】　それでは、第４回東京都交響楽団の将来像に関する有識者懇談会を、これで終了したいと思います。長時間にわたりご協力いただきまして、ありがとうございました。